

スズメの存亡と私

HD 10 に保存

陳 開心

訳 福井和二

田畑などで農家の人が時々気まぐれにスズメ追いの台の上で、年寄や子どもが竿を振り回し、パンパンと音をたててスズメを追う様子を彷彿とさせる風景は絶えて久しい昔のこととなった。

ひょっとすると、欲望の満足か、別の面で必要があって大きな負担があるのか、我々は日増しに、望む生活物資を楽に入手できるようになったいま、我々が生存する環境は少しずつ、かえって悪化した。青い空は再び戻らず、山は枯れていき、鳥は歌わず、花は匂わない、我々の地球は傷だらけになった。もしも、このまま続くのなら、本当に地球は近いうちに終わりが来てしまう。幸いに我々には考えることができ、我々には危機意識がある。時を移さず“我々の地球だ、地球は我々の家だ”と呼びかけた。誰もが動き始め、植樹造林、屋敷周辺の美化、狩猟をやめて我々の仲間たち生き物を保護しはじめた。以来今日、鳥獣は安静になり、魚は増えた。それにつれてスズメは次第に増えてきた。枝先や軒先で休む、頭が丸く尾が短く、嘴が円錐形のスズメ、私は心から親しみを感じる。その栗褐色の羽毛は頭頂と頸部から背面が褐色の羽毛に黒褐色の斑点など美しく可愛い。

物は珍しいほど貴い！間違いなく、想えば昔、スズメは何処にでもおり、見かけない所はなかった。屋根の上、軒下、樹洞の中に、いたる所スズメが繁殖して家庭を作っていた。麦を食べようと一群のスズメが麦畑へ飛来すると、村の子どもたちが音を立てて追い払う。何羽かのスズメが畑のなかで麦粒にありつき、高く掲げた案山子は風向により両腕を振り回す機械で脅す、スズメは直ちに不埒な行動をやめる。もしも貴方が朝寝をしたら、家の周りのスズメが囁りが煩くて眼を覚ますだろう。

スズメの大量死は、当然スズメの“四害の一つ”^{*1}にあたるとした間違いに戻るべきである、私も関係がないとはいえない。

パチンコは素晴らしい玩具で、自由に携帯できる武器であり、仲間たちは競って、スズメを生きている標的にした。もちろん、山で牛を追うときも、餌の草刈りをするときも、パチンコは始終持っていた。弾はそこらの石ころを適当に拾って使用した、少なくとも1日3～5羽、多いときは十数羽のスズメを私はパチンコで殺した。

秋、収穫の後、穀物乾し場に群をなしてスズメが集まり穀物を食い散らす。パチンコで恨みをはらしたり、罠をかけたりした。一本の紐で罠を作って、目の前で運の悪いスズメは、毎回罠に落ち、羽をむしられ、火あぶりにされてしまった。

私の手にかかって横死したスズメが、最も多かったのは私の少年時代のことではない、青年期のことでである。そのとき死んだスズメは、いたずらっ子でもない不純で軽率な人たちに、粗末に扱われ食べられたことを恨んでいるだろう。スズメを食べることは、生存のための本能で、10日や半月も美味しいものに会おう楽しみもなかった。私と仲間たちは全身の力と知恵を尽くして、或るとき屋根に上ってスズメの巣をつかみ取り、すぐに壊した。黄色の大きな口を開けた雛鳥の運命は！ 或る秋の夕暮れ、スズメがトウモロコシ畑に集まっている時刻、スズメが何処に集まっているかを突き止め、日没後スズメのねぐら入りが終わるのを待って、四五人が一組みになって行動を起こした。左手に懐中電灯、右手に杖、抜き足差し足、一步また一步とトウモロコシの葉の上で熟睡している一羽、一羽の命に接近し、すぐに罪深い杖を降り下ろす。スズメはチーチーと哀れな鳴き声をだす。スズメの殲滅戦が終わり、むろん勝利を祝う。盛んに褒めたたえあう声の中で、互いに見合わせた顔に満足の輝きがあった。これにより錆びついた胃を満たすのは当然だった。

20年が過ぎた。そのスズメたちが家の周辺や、田畑に現れた頃、私や仲間たちはスズメに付いて詳しく知ることとなった。親しいスズメたち！、悔恨に耐えず両手を合わせ、深く頭を垂れる。

今日、幼稚園の子どもたちでさえ動物が人類の友だちだということを皆知っている。我々は動物とともに親しくしようと考えている。ただただ、動物愛護、動物保護と、我々は生活の周辺は再び色どりを取りもどした。

かってスズメに危害を加えた私が、きっとその百倍の努力を払って環境の愛護と保護に努めなければならない。

訳注

*1 “四害之一”；1950年代、毛沢東による文革の時代、人間生活に害をなすものとして、ネズミ、スズメ、カ、ハエの四つを挙げて、号令一下、国中で駆除運動を行った。